

【タイトル】精神科救急における高齢者の実態

【要旨】

1. はじめに

日本の精神科救急医療システムは各自治体によって運営されている。多くの患者は問題行動により警察に保護された場合、都道府県または政令指定都市に設置されている精神保健福祉センターに通報されて受診となる（警察官通報）。精神科救急とはその地域の精神医療の中核を担うシステムであり、社会情勢、地域性等に柔軟に対応していかなければならない。近年の老年人口の増加に対し、精神科救急の領域でも早急な対策が求められるはずだが、精神科救急に占める高齢者の実態についての報告は少ない。そこで今回当院で対応した警察官通報ケースのうち 65 歳以上の患者の実態を調査し、その特徴をまとめ若干の考察を行ったので報告する。

2. 対象と方法

2002 年 4 月から 2007 年 3 月末日までに北里大学東病院を受診した警察官通報 291 ケースについて「措置入院に関する診断書」および診療記録から年齢、診断、副診断及び主要症状、身体合併症の有無、背景などについて情報を得る後方視的調査を行った。データの管理に関しては個人情報保護法に準じて行い、匿名性に配慮して個人名を符号化し、匿名性に配慮すると共に情報の流出に最大限の注意を払った。統計学的手法としては、平均値の比較は Student の t 検定、比率の比較には χ^2 検定を用いた。有意水準を $p < 0.05$ とした。

3. 結果

高齢患者は 14 名 (4.8%) で平均年齢は 76 ± 8.0 歳であった。年度毎の高齢患者の割合をみると 2002 年度 3 名 (3.7%)、2003 年度 0 名、2004 年度 0 名、2005 年度は 6 名 (14.6%)、2006 年度は 5 名 (11.6%) とここ数年は増加傾向であった。高齢患者の主診断としては有意に F0 (器質性精神障害) 6 名 (42.9%)、F3 (感情障害圏) 5 名 (35.7%) が多く、F2 (統合失調症圏) 3 名 (21.4%) が少なかった。副診断及び主要症状についてはあるかないかで 2 群を比べたところ、意識障害 2 名 (14.3%)、認知症 8 名 (57.1%) の存在が有意に多く、精神運動興奮 5 名 (35.7%) が有意に少なかった。背景については精神科通院歴なし 7 名 (50%)、入院歴なし 11 名 (78.6%) が有意に多かった。自傷他害の別については高齢患者と 65 歳未満患者において明らかな差はなかったが、感情障害圏の高齢患者は同圏の 65 歳未満患者に比べて有意に自殺企図 5 名 (100%) が多かった。単身生活者 4 名 (28.6%) の割合については明らかな差はなかったが、高齢患者は高齢配偶者との二人暮らしなど介護力の低い家庭が多い (10 名、

71.4%)ことが分かった。身体疾患の合併 7 名 (50%) は高齢患者で有意に多かった。また、7 名 (50%) は入院後新たな身体合併症のため治療を要した。その内容は心内膜下梗塞、誤嚥性肺炎など深刻なものであった。

4. 考察

2005 年度の神奈川県の高齢者人口の割合は 16.8%であった。人口に占める高齢者の割合に比して、精神科救急システムを利用する高齢者が少ないことは都立豊島病院の報告 (4.98%) と同様であった。しかし 2005 年度以降、高齢患者の割合は 10%強と増加傾向を認め、この傾向は都立沢病院の報告と一致しており、今後さらなる増加が見込まれた。また精神科救急を利用する高齢患者の特徴について、第一として認知症を含む脳器質疾患による問題行動、第二として感情障害による自殺企図であると考えられた。今回我々の調査では単身生活者が多いという結果にはならなかったが、個々の症例を見てみると単身ではなくとも、配偶者と二人暮らしといった介護力の低い生活環境が多いことが分かった。従って介護力の低さのために事前に精神科医療に結び付けられなかったことが警察官通報となった原因の一つであると考えられた。また、今回我々の調査では既存の身体合併症が多かったことに加え、入院後に新たに生じる合併症も多いことがわかった。その内容をみると、薬剤に起因する深刻なものが多く、より慎重な身体管理が求められた。高齢患者の治療は精神科医と身体科医の緊密な連携が不可欠であるが、精神科救急システムの協力病院の約 9 割は単科の精神病院であり、高齢患者の増加がシステム自体の運営を困難にする可能性があると考えた。今回は高齢患者の急性期に限定した調査であったが、精神科救急を利用した高齢患者の自宅退院を目指すには医師、看護師、ソーシャルワーカーといった他職種の複合チームを作り、段階的なショートステイの利用や、電話相談を含め 24 時間対応できるシステムを確立することが推奨されている。今後は精神科救急を利用した高齢患者の転帰についての追跡調査をしたいと考えた。

(1946 字)